

神の真実にかけて

コリント人への手紙第二 1章 15-20節

はじめに

今日は、「コリント人への手紙第二」から学びます。コリント教会は、パウロが開拓伝道をしてできた教会です。パウロは、1：13-14にあるように、コリント教会のことを誇りに思っていました。そして、コリント教会も、パウロのことをある程度理解してくれていて、イエス様がこの地上に来られる世の終わりの時には、コリント教会もパウロのことを誇りに思ってくれて、パウロのことを完全に理解してくれる、と期待していたのです。

パウロは、コリント教会との間に、互いに誇り合う関係がある、互いに理解し合う関係がある、少なくともイエス様がこの地上に来られる世の終わりには、互いに完全に誇り合うことができる、理解し合うことができると確信していたのです。

1. パウロの計画

その確信に基づいて、パウロはコリント教会を訪問する計画を立てたのです。彼が最初に立てた計画は、Iコリント 16：5-7に書かれています。「**私はマケドニアを通過して、あなたがたのところへ行きます。マケドニアはただ通過し、おそらく、あなたがたのところ滞在するでしょう。冬を越すことになるかもしれません。どこに向かうにしても、あなたがたに送り出してもらうためです。私は今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところにはしばらく滞在したいと願っています**」。パウロが最初に立てた計画では、まずマケドニアに行って、その後にコリントに行き、コリントから次の場所に行くという計画でした。しかもコリントで冬を越すぐらい、長い間、滞在する計画でした。

しかし今日の聖書箇所 15-16節には、こうあります。「**この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。すなわち、あなたがたのところを通してマケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところへ帰り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです**」。この計画は、最初に立てた計画と少し違っています。最初に立てた計画は、マケドニアからコリントに行き、コリントからユダヤに行くという計画でしたが、今回の計画は、まずコリントに行き、コリントからマケドニアに行き、マケドニアからもう一度コリントに戻り、コリントからユダヤに行くという計画になっています。つまりパウロは、最初に立てた計画から、計画を変更したのです。変更点は二つです。一つは、まず始めに行くのは、マケドニアではなくコリントに変更したということです。もう一つは、コリントへの訪問は、一回ではなく二回にするということです。

この計画の変更の背景には、コリント教会に起きた問題があります。パウロは、コリント教会に何か問題が起きたため、その問題を解決するために、まず最初にコリント教会を訪問

することにし、マケドニアで用事を済ませてから、もう一度コリント教会を訪問しようとしたのです。そのようにパウロが二度訪問することで、コリント教会で起きた問題に対して神様の恵みをもたらすことができると、パウロは信じていたのです。しかし、パウロのこの変更した計画も、どうやら実現できなかったようです。

2. コリント教会の反応

というのは、17 節にこうあるからです。「**このように願った私は軽率だったのでしょうか。それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、『はい、はい』は同時に『いいえ、いいえ』になるのでしょうか。**」

コリント教会の中には、パウロの計画は「軽率だった」「人間的」であったと批判する人たちがいたようです。「軽率」というのは、「軽はずみ」「気まぐれ」という意味です。また「人間的」というのは、「信仰的ではない」「霊的ではない」という意味です。つまりパウロの計画は、十分考えられた信仰的な計画ではないと批判されたのです。というのは、パウロは結局、コリント教会には行かなかったようです。1：23 を見ると、「**私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりからです**」とあるからです。パウロは、何らかの事情で、コリント教会へ行かなかったのです。しかしそれは、パウロの軽はずみな思いからではなく、コリント教会への思いやりからであったと言うのです。

パウロは、コリント教会を誇りに思っていました。そのため、コリント教会に問題が起きたとあれば、最初の計画を変更してまでも、まず最初にコリント教会のもとに駆け付けて、神様の恵みをもたらそうとしたのです。そしてマケドニアで用事を済ませてからも、わざわざもう一度訪問して、二度も神様の恵みをもたらそうとしたのです。しかし、その計画も、実際には変更しなければなりませんでした。おそらくパウロを批判する人たちが、コリント教会にいたからです。パウロがコリント教会を訪問すると、コリント教会に混乱を招く恐れがあったため、パウロは彼らへの思いやりから、訪問を諦めたのです。

パウロは、常にコリント教会のことを思っていました。コリント教会にとって、何が益となるかを常に考え、時には計画を変更し、計画を諦めたりしました。しかし、コリント教会のある人たちは、パウロを批判し続けたのです。パウロの計画は「気まぐれだ、信仰的でない」、パウロは計画をころころ変える、パウロは「はい」と言ったと思えば、「いいえ」と言ったりする、パウロは言葉では「はい」と言いながら、心の中では「いいえ」と言っている、つまりパウロは言葉で言っていることと、心の中の思いは違っている、またパウロは言葉で言っていることを実行しない、計画を実行しない、約束を守らない、パウロは言葉で言っていることと、実際の行動が違っている、などと批判されたのです。つまりパウロは、言葉と心の中の思いと行動がバラバラで、信用できないと批判されたのです。

3. パウロの弁明

そこでパウロは、18 節以下で、その批判に対する弁明をします。18 節でパウロは

こう言います。「**神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私のことばは、『はい』であると同時に『いいえ』である、というようなものではありません**」。パウロは、自分の言葉は、「はい」であると同時に「いいえ」であるようなものではない、つまり言葉と心の中の思いと行動がバラバラで、信用できない言葉ではないと弁明します。

もしパウロの言葉が信用できないということになれば、パウロが語ってきた「福音」そのものも信用できないということになります。そしてイエス様ご自身も、神様ご自身も信用できないということになります。ですからパウロはここで、自分の言葉は決して信用できないものではないと弁明しようとするのです。

19 節でパウロは、こう言います。「**私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、『はい』と同時に『いいえ』であるような方ではありません。この方においては、『はい』だけがあるのです**」。パウロはここで、イエス様は信頼できる方であると弁明します。コリント教会にイエス様のことを宣べ伝えたのは、パウロだけではありませんでした。シルワノとテモテも、コリント教会を開拓した時には、パウロの同労者であったのです。ですから当然、シルワノもテモテも、コリント教会にイエス様のことを伝えたのです。コリント教会でパウロを批判する人たちは、パウロの言葉は信用できないと言っています。しかしイエス様のことは、シルワノもテモテも宣べ伝えたことです。決してパウロだけが宣べ伝えたことではありません。シルワノもテモテも、イエス様のことを宣べ伝えたのであるなら、イエス様は信頼に値する方ではないかとパウロは言っているのです。

そればかりではなく、イエス様は、言葉と心の中の思いと行動がバラバラな方ではない、イエス様においては「はい」しかない、つまりイエス様の言葉は常に真実だと言うのです。さらに 20 節では、「**神の約束はことごとく、この方において『はい』となりました**」とあります。神様は、旧約聖書で様々な約束をしておられます。その約束はすべて、イエス様において実現したのです。イエス様は、神様の言葉を実現させる方なのです。

例えば、神様は私たちが愛していると言われます。しかし、その言葉が真実かどうか、神様が私たちが本当に愛しているかどうかを、私たちはどのように知ることができるのでしょうか。パウロは、ローマ 5：8 で、このように言っています。「**私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます**」。神様の愛を、目に見える形で私たちに示してくださったのは、イエス様です。イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架で死んでくださったこと、これこそ神様が私たちが愛していることの何よりの証拠です。二千年前にイエス様が十字架で死なれたという歴史的事実こそ、神様の愛の証拠なのです。その意味で、神様の約束は、イエス様によって「はい」となり、実現したと言えるのです。

パウロが必死に訴えているのは、神様の約束、神様の計画、神様の言葉は、真実であるということです。その真実さは、イエス様によって私たちに示されたということです。

おわりに

私たちの約束や計画や言葉は、時に変更を余儀なくされることがあります。どんなに誠実であろうとしても、予定外のことが起こり、変更することもあります。パウロもそうでした。パウロはコリント教会に誠実であろうとしました。誠実であろうとしたために、変更を余儀なくされました。しかしそのことが誤解を生み、批判されることになりました。また約束や計画や言葉の変更は、私たちの罪や軽率さ、人間的な思いに原因があることもあります。いずれにしても、私たち人間の約束や計画や言葉は、完全ではありません。やむを得ず変更しなければならないこともあるのです。

しかし神様においては、そのことは当てはまりません。神様においては、真実だけがあるのです。旧約聖書のヨブは、神様についてこのように言いました。「**あなたには、すべてのことができること、どのような計画も不可能ではないことを、私は知りました**」(ヨブ 42:2)。私たち人間の約束や計画や言葉は、あやふやです。しかし神様の約束や計画や言葉は、真実で確かです。聖書はそのように教えているし、パウロもそのように信じていました。

私たちはどうでしょうか。私たちは、この聖書に書かれている神様の約束や計画や言葉は、真実で確かなものであると信じているのでしょうか。私たちは時々、疑う心を持ちます。それはおそらく、私たち自身が真実で確かでないからです。私たちは完全ではありません。私たちはやむを得ず約束や計画や言葉を変更せざるを得ない時があります。また私たちの罪や軽率さや、人間的な思いから変更せざるを得ない時があります。ですから、神様も私たちと同じように、変更する時があるのではないかと疑ってしまうのだと思います。神様もきっとやむを得ない事情があるのではないかと、神様もさすがに私の罪深さを見たら変更せざるを得ないのではないかと、思ってしまうのです。

しかし神様と私たちは違います。神様は、私たちのような方ではありません。神様は、全知全能の創造者であり、私たちは罪深い被造物です。この世において、真実で確かなものがあるのでしょうか。私たちが、人生を懸けて信頼できるものがあるのでしょうか。もしあるとすれば、それは神様であり、イエス様ではないのでしょうか。この世は変わりやすいものです。人間の心も変わりやすいものです。しかし聖書はこう言います。「**イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません**」(ヘブル 13:8)。永遠に変わることのないイエス様こそ、私たちが人生を懸けて信頼できる唯一の真実で確かなものです。

20 節に、「**それで私たちは、この方によって『アーメン』と言い、神に栄光を帰すのです**」とあります。「アーメン」とは、「確かです」「真実です」「そのとおりです」という意味です。私たちは、イエス様こそ「アーメン」である方、「確か」で「真実」な方として受け入れて、神様の栄光を現して生きることが求められているのです。

私たちは確かに完全ではありません。しかし開き直すことはできません。真実で確かな神様、イエス様を信じている私たちは、私たちも真実で確かであればなりません。自分の言葉と心の中の思いと行動を一致させなければなりません。また約束や計画や言葉は、できる限り実行しなければなりません。そうでなければ、神様やイエス様の真実さや確かさが疑われることになるからです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たち人間は、大変あやふやな存在です。言葉と心の中の思いと行動が一致せず、約束や計画や言葉も変更ばかりです。この世も人間も変わりやすいものです。私たちは、目に見える何かに信頼して歩もうとします。しかしこの世には、神様以外に真実で確かな存在はありません。目に見える何かに信頼すれば、裏切られたと憎しみを生み、絶望感を味わいます。どうか自分の人生を懸けて信頼できるものは何かを見分けることができますように。どうか、イエス様を「アーメン」と言って、神様に栄光を帰して歩めますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。